



いつでも どこでも ホスピスケアを!!

<http://www.normanet.ne.jp/~gun-hosp/>

第54号

発行  
 群馬ホスピスケア研究会  
 責任者 土屋 徳 昭  
 事務局 高崎市北久保町10-9  
 (吉本宅)

☎・FAX 027(353)1341

e-mail tuchiyaajp@yahoo.co.jp

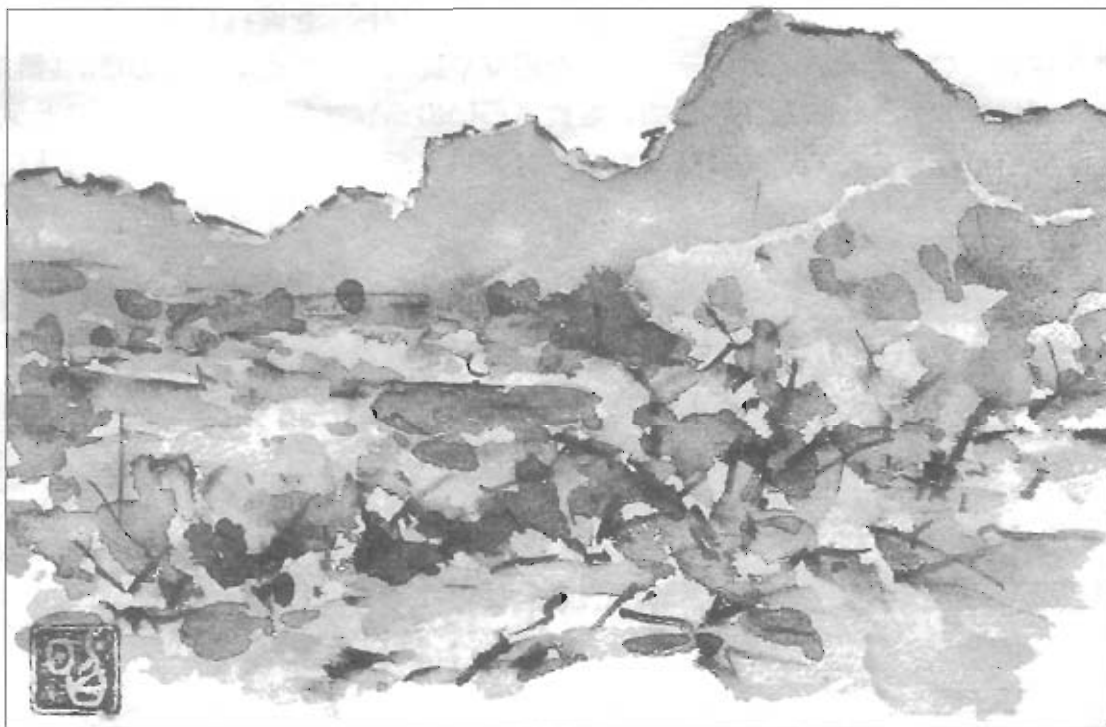
☎・FAX 027(323)5824

e-mail SNB32318@nifty.com

印刷 松本印刷工業(株)

前橋市紅雲町1-12-3

☎ 027-221-5015

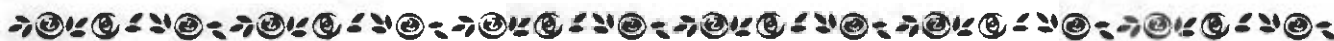


— プロフィール —

星野 昭二 (1927~2000) 前橋市に生まれる。40歳まで公務員を勤め、以後、千代田町で貴金属商を始める。

絵を趣味とし、油絵を描く。定年後は水彩画に転向。海外の風景から、群馬県内に至るまで、幅広く精力的に描く。

新槐樹社に所属・会員。上野の森美術展に入選他、県展入選、個展も開く。元総社公民館のカルチャー講座に水彩画講師として奉仕、まもなく病気になる。没後、遺作展開催。



目 次

おとなの童話 “ミソちゃん、おじさんがきたよ!” ..... 小平 享 ... 2~4

日本ホスピス在宅研究会全国大会9月 “福島大会” 案内 ..... 5

市民ホスピスセミナー10月 “色平哲郎さん講演会” 案内 ..... 5

妙義 “さくらの里ハイキング” ..... 剣持政幸・高崎 昭・星野潤子他 ... 6~7

在宅で妻を看取ってPart 1 -人生の喜怒哀楽- ..... 伊勢崎市 佐々木清人 ... 8~9

知りたい聞きたいQ&A “セカンドオピニオンって?” ..... 10~11

寄付ありがとう・会計報告等 ..... 11

これからの「患者・家族会」死別体験者の集い「分かち合いの会」の予定 ..... 12

編集後記 ..... 12

## おとなの童話

## ミソちゃん、おじさんがきたよ！（第4話）

こ 小 平 たいら 享

## ＜第1話から第3話までのあらすじ＞

奥さんをごんで亡くして独りぼっちになったおじさんは、墓地のある森林公園に毎日行っているうちに小鳥のミソサザイと仲良しになった。事情を知らないミソサザイはいつも一人できて淋しそうなおじさんに“おばさんフレンド”を連れて来るように促すとおじさんは亡くなった奥さんとの楽しかった日々や闘病のことを話し始めた。（第1話）

早春、バレンタインティが過ぎた頃、写真ぎらいのミソサザイがおじさんにモデルになっても良いと言う。おじさんはシャッターをきりながら、ミソサザイとの会話と行動を通じてその生態を知ってくる。ガールフレンドからバレンタインティのプレゼントを貰ったミソサザイは間もなく山の方にゆき子育てをしようと言う（第2話）

秋、激しい台風の後、いつものようにおじさんが公園に行くと、まだ山から降りてきているはずがないミソサザイに逢う。理由を聞いてみると台風の豪雨でパートナーと巣立ち直前のひななどが行方不明になったという。おじさんはミソサザイの暖かいマイホームと子育ての思い出、そして遭難の悲劇の話を自分と重ね合わせながら聞いてやる。そして、ミソサザイの気持ちが少し落ち着いたところで遠慮がちに最近“おばさんフレンド”ができたことを伝える。（第3話）

第3話までの全文は『“続・悲しみ、そして愛”』（群馬ホスピスケア研究会 2002年刊）に掲載されています。

それから6か月余りが過ぎ、山々が若葉に萌え始めた5月。おじさんはおばさんフレンドを誘ってバードウォッチングにでかけた。この頃になるとはるか南から海を越えて飛んでくるオオルリやキビタキがあざやかな姿とともに美声を聞かせてくれる。

溪流沿いの林道を上流に向かってしばらく歩くと早速“チュウチュイ ビービー ジジジ”とオオルリの高い声が聞こえてくる。初めて聞くさえずに胸をわくわくさせながらその姿を求めておじさんたちは近づいてゆく。しかし、高い枝先にいるらしく声はすれどもその姿は若葉にさえぎられて見るができない。姿も声もおばさんフレンドに見せたり聞かせたりと、かっこよいところを見せたかったけれどこの場はあきらめることにして、林道から別れて山道に入ってゆく。



◆ミソサザイ◆

スズメの半分近くの小型。谷川ぞいの暗い林を好み、やぶや倒木の間にもぐって暮らす。冬は里山にもくる。ツェツ、ツェツと鳴き、春早くからチョツィツィツーペチルルルなどと大声で長く美しく歌う。全長10cm以下。

道は小さな流れに沿って登り、両側は急な斜面になっているので陽射しはほんの僅かな時間しかなさそうなところだ。どこからか“ピイチュリ ピィ ピピリ”と<sup>ふしまわ</sup>節回しのよい声が聞こえてくる。多分キビタキだろうが道からは離れていて近くには行けそうもない。冬と違って夏のバードウォッチングは姿より声を楽しむものと言われているがまさにそのとおりになってしまったかな、と思い始めたとき、流れの方から“チェ、チェ”と小さな声が聞こえてきた。

「あ！ミソちゃん。ミソちゃんじゃないか」

「おじさん。ちょっと待っててね。ほくいまとっても忙しいんだ」

と、ミソサザイはどこかに飛び去ってしまった。おじさんたちは山道の端に数分間たたずみながら待っているとミソサザイは再び現れた。

「お待ちどうさま。先日、ひなたたちが<sup>かえ</sup>帰ったところで毎日<sup>えき</sup>餌を運ぶのにてんでこ舞いしているんだよ。おじさんたちが来てくれるなんて予想もしていなかったんで驚いたな」

「おじさんたちもミソちゃんに会えたらいいな、と少しは期待していたけれどこんなに早く会えて嬉しいよ」

「去年、ファミリーが台風の豪雨に流されてしまいどうしてよいか分からなくて<sup>ぼうぜん</sup>呆然としていたとき、おじさんはほくの話<sup>はなし</sup>を親身になって聞いてくれたよね。嬉しかった。そのことがほくの今がある原点かもしれないな」

「おじさんも奥さんを亡くして落ちこんでいるとき、ミソちゃんにおじさんの気持ちをいっぱいぶつけたよね。悲しい話を聞いてくれる人なんてそうはいなかったからミソちゃんに会うのが救いだったんだ」

「それで、ほくが同じような状態になったときにおじさんはほくの気持ちをよーく分かってくれたんだね」

「ミソちゃんのつらい話を初めて聞いたあと、ミソちゃんが元気になったかなと思ってもまた物思いにふけてポーとしているミソちゃんに何度も会ったね」

「おじさんと話しているときはよかったけれど、おじさんが帰ってしまい、公園でほくがひとりぼっちになると可愛かったひなたちや、やさしかった彼女のことが思い出されて何もする気がなくなることがときどき



### ❖オオルリ❖

夏鳥。溪流、湖沼などに近接する林にいる。さえずり（本文参照）はウグイス、コマドリとともに日本三鳴鳥の一つ。雄は頭からの上面は紺るり色、顔から胸は黒、腹は白色。繁殖期は縄張りを持ち、昆虫やくも類を採食。全長約16cm。

あったんだ」

「流された家族のことをそんなに簡単に忘れられるものではないよね。おじさんだって家に一人だとたまらなくなつては奥さんの墓地がある森林公園に毎日でかけるようになったんだ。ただ、おじさんがミソちゃんと違ったのは“分かち合いの会”という集まりにも参加したことだね」

「“分かち合いの会”って？」

「愛する人や、かけがえのない人を亡くした人達の集まりなの。その会では悲しみや苦しみを互いにおつつけあったり共感の涙を流しあったりしているんだ」

「それって、おじさんとほくの関係も同じじゃないか。人と小鳥でも分かち合いができたんだ！」

「きょう見違えるほど元気になったミソちゃんに会えたけれど、いつごろからこうなったの？」

「おじさんが公園にときどきおばさんフレンドを連れて来たことがあったろう。そのおじさんは一人で来るおじさんとは何か違っていきいきしていることに気が付いたんだ」

「自分では意識していなかったけれどそうだったのかな」

「そんなおじさんを見ているうちに、ほくもいつまでも一人で閉じこもらずにガールフレンドを見つけてみ

ようという気持ちでできたんだ」

「公園ではずーとひとりのミソちゃんしか知らなかったけれどいつの間にかそんなふうに変っていたんだね」

「春が近づいて、山のほうに帰る頃、公園で知り合ったガールフレンドにおもいきってプロポーズしたんだ」

「それでどうしたの？」

「おじさん、そんなに根ほり葉ほり聞かないでよ。ほくがいまとっても忙しいのを見て想像できるでしょ」

「ごめん、ごめん。でも、ミソちゃん、前のファミリーのことはもうどうでもよくなったのかい？」

「そんなことあるわけないでしょ。おじさんだってそうだろう」

「うん、でも病気が悪くなって苦しんでいる姿やそれを看病して辛かったことは少しずつ遠ざかって行き、いまは楽しかったことの思い出だけがいっぱい残っているんだ」

「ほくはいまのひな達に遭難したひな達への愛情を重ねて育て上げているんだ。そんなほくたちを前の彼女もどこかで見守っていると思うよ」

「ミソちゃんのをいっぱい受けてよい子に育つだろうね」

「いまは餌をねだるだけだけれど、あと2～3か月たてばやんちゃになりとても可愛くなるよ」

「おじさんには子供がいなかったけれど、このお婆さんフレンドの孫のトムくんと仲良しになったんだ。いま3才になったところでいたずらもするけれど可愛いさかりだね」

「よかった。それで、新しい“いのち”ってすばらしいことが少しは分かったんじゃない」

「うん、いっしょに滑り台したり、ブロック遊びしたり、なんだかおじさんのほうが遊んで貰っているようだね。このあいだは肩車したらキャッキャッと大喜びしてたよ。いまはミソちゃんをはじめとする小鳥くんたちだけでなく、トムくんからも生きる力を貰っているのかもしれないな」

「今年は豪雨がきても大丈夫のところマイホームを造ったからひなたちが立派に巣立つのを見送ることができると思うよ。そして秋も深まったらまた森林公園でおじさんたちに会おうね」

「ところで、ミソちゃんは小さいくせに“さえずり”は大きな美しい声で歌うそうだね。おじさんたちはまだ一度も聞いたことがないんだ」

「いま、この付近の森でオオルリくんやキビタキくんが高い声で歌っているのが聞こえているでしょう」

「おじさんたちがここへ来たのもそれを聞くのが大きな目的だったんだ」

「ほくは、彼らと違ってイケメンでもないし地味でチビだけれど、歌だけは負けてないよ」

「それじゃ、よけいに聞きたくなかったな」

「公園にいる頃はまだ歌うシーズンではないが、雪が解けきっていない山に帰って来た頃に歌うラブソングはわれながら自慢できるものだよ。ぜひおじさんたちに聞いて欲しいな」

「よーし、来春はミソちゃんとラブソングのデュエットをしようか！」

「イケナイ。つついおじさんと長話しになっちゃった。ひな達をひとりで見ているパートナーに叱られるちゃうよ。バイバイ！」

…………… 完 ……………



#### ❖キビタキ❖

夏鳥。山地の林に住む。葉や枝にいる昆虫やくも類を採食。雄は頭が黒、眉斑と胸部は橙黄色、下腹部は白色。さえずりは本文参照。全長約14cm。

日本ホスピス在宅ケア研究会のご案内

2004. 9. 11 (土)・12 (日)

## 第12回 全国大会・福島大会 (会場は郡山市)

テーマ **「共に考えよう、わたしのいのち、  
あなたのいのち、みんなのいのち」**

**命の尊厳とその在り方を軸に、ホスピス・在宅ケアを考える会**

基調講演 佐藤 初女さん (弘前市・森のイスキア主宰)

特別講演1 日野原重明さん 対談 鎌田 實さん

特別講演2 柳田 邦男さん 対談 山崎 章郎さん

シンポジウム **「いのちの循環を考える」**

溝口俊夫さん、玄侑宗久さん、津島慈道さん

一般演題 看護部会 市民部会 子供部会 在宅ケア部会 宗教部会  
グリーンケア部会 スピリチュアルケア部会など

市民部会では、がん医療の入り口である「告知を巡って」生命倫理の谷田憲俊さん (山口大学教授) と弁護士の鈴木利廣さん (薬害エイズ事件弁護団長) の対談の中から、人として尊厳ある「告知」の在り方考える時間がもたれます。

司会を群馬の土屋徳昭と吉本明美が担当します。みなさん誘い合って参加しましょう。

## ◆ 市民ホスピスセミナー ◆

## 「山村でいのちをささえる」

～金持ちより、心持ち～

日時 2004. 10. 24 (日) 13:30～16:00

場所 群馬県社会福祉総合センター

講演 いろひらてつろう  
色平哲郎さん

(長野県南佐久郡南相木村国保直営診療所所長)  
長野県厚生連佐久総合病院内科

現代のあかひげ  
色平哲郎



【いろひら・てつろう】

1960年神奈川県生まれ。東大中退後、世界を放浪。その後、医師を目指し京都大学医学部へ入学。長野県の無医村で診療所の所長を務める傍ら、外国人HIV感染者・発症者への生活支援、帰国支援などに取り組み、95年タイ政府より表彰される。民間NPO「佐久地域国際連携市民の会：アイザック」事務局長。

「はくは“風の人”、村の人たちは“土の人”」と屈託なく語る色平哲郎の言外には村人への優しさがあふれている。無医村での地域医療や外国人の支援に積極的に取り組んでいるにもかかわらず、気負いも街いもまったくない。

人生の面白さを体で表現する色平の生き方は現代人が忘れた何かを思い出させてくれる。



昨年春の野外交流会が、生憎の雨でお流れになった後、とんだ過剰動に巻き込まれ、結局ドクターのちよっとした一言で、笑い話で済む間末で済みましたが、今度は右胸部の痛みが出てきたため、診ていただいたところ「心因性による狭心症の疑い」の診断が「下り、思わず「ウッソー、ホントかよー!？」と、突然のことに混乱してしまいました。

そんな不安とは別に、心電図などに兆候があらわれない状況から、「運動不足もあるかなあ?」という担当医師の判断で、散歩をすすめられ、今回のさくらの里ツアーに参加させていただくことになった次第です。

参加者の顔ぶれから、興業主のYさん曰く、「「こそすもすの会」ならぬ「さくらの会」だな」といってみんな大笑いしました。

何種類もある満開の八重桜やヤマツツジが咲きはころび、遠くの展望台から眺めると、まるでピンクの絨毯が敷き詰められているかのような光景がまばゆく映り、散歩するコースも緩やかな道をゆっくり時間をかけながら辿ることができて、のどかな一日を満喫することができました。 香妻町 剣持 政幸



## 妙義『さくらの里ハイキング』

2004. 4. 26「目に青葉 山 ほととぎす 初カツオ」

その日、山にはカツオこそいなかったが、妙義の山の空は青く澄み渡り、新緑は、新しい命の望生を喜び、叫ぶようにおどり、鳥たちは美声の限りで歌い、勝ち誇っていた。

群馬ホスピスケア研究会、野外交流会、17名プラス「ワン」の参加で、一日、命の洗濯をした。(写真提供、高橋金平、小平 享、佐々木清人、土屋富子)



「ハイキング」心躍ることば、そして皆さんと食べる弁当のうまさ、楽しさ、手作りの品々を用意して回して下さる友々、なんでも安心して話せる心安さ、こんなに食事は美味だろうか。折から花は満開、木々は緑を増し自然に抱かれて自分も自然の一部になったようだ。

今朝、寝坊してはと気をつけていたが4時13分目覚めた。いつもグズグズしているのにさっと起床して8時発の電車にゆうゆうと乗れた。もう安心、車中で朝食のおにぎりを食べる。新前橋の社会福祉センターに着いたら間もなく土屋さんの車がきて同乗させて貰う。遠くから見た妙義山はゴツゴツしてゴジラの背中のような感じが道路は整然としていた。歩きながら皆さんと話しをする。東北訛の橋本井、気取ってなんかいらねえとただ嬉しくて楽しくてたくさん癒しをいただきました。皆さんのお蔭です。これから自分から合いの会のほかにも出合いの場を設けてください。

宇都宮市 高崎 昭



4月24日少し肌寒いが晴天に恵まれて、楽しいハイキングが出来ました。参加者17人と犬一匹でした。白色や淡紅色のヤマザクラ、ソメイヨシノ、サトザクラ、濃紅色で八重咲のフクロクジュ、カンザン等が出始めた緑葉と相まって、それは見事に山をさくらに染めて回り、心ゆくまでさくらを満喫出来ました。

昼食は車庫になって各人持参した物を、分け合いながら、おしゃべりも楽しく頂きました。

私もこの会に参加させて頂き一年になりますが、死の悲しみに直面した時、それを共有する事の出来るのは同じ経験者でこそ解かり合えます。この分かれ合いの会の皆さんに支えられ、自分に残された人生を、しっかりと生きて行きたいと思っております。

一人で悩むことなく、皆さんへ行く道です。共に頑張ってください。会の為にお骨折り下さる方々に、心より感謝申し上げます。

前橋市 星野 潤子

「来てよかった!!」これが私の心からの気持ちでした。ちょうどこの頃、体力的、精神的に自信を無くしていた私は、前の晩ギリギリまでハイキングへの参加をためらっていました。

「もしかして、このハイキングで最後まで歩き続けられたら、精神的に変わるかもしれない」と思ったとき、「変わりたい!!!」という気持ちが勝りました。

吉本さんからの一押しもあって、一歩踏み出して見る決意をしました。

途中で苦しいところもあつたけれど、「ここで諦めたら何も変わらない」と思い直し、歩き切りました。

桜でいっぱいの子ばらしい自然とホスピス研究会のみなさまの優しさ、人きな愛に包まれ、私は最後まで頑張り抜くことができました。この日のことを絶対忘れないように、これからも一歩ずつ前を向いて歩きつづけて行きたいと思えます。

このような機会を作り、参加を呼びかけてくださったホスピス研究会の皆様に感謝!!です。 前橋市 C・A



## 在宅で妻を看取って

—人生の喜怒哀楽—

伊勢崎市 佐々木清人

人は生からそして死へ、その間に出会いと別れ、その中に数々の喜怒哀楽のドラマが誰にでもあります。私は、この中で最も辛く苦しく悲しい伴侶の闘病、そして介護、別れを味わうに至りました。

### 【出会い】

今から35年以上前のこと、私共は音楽を聴くことが趣味で今ならさしずめCDでしょうが当時はまだレコードの時代、ステレオはセパレートの出始めの頃、市の広報でレコードコンサートを知り、その中で出会いました。時にはバスや電車で高崎の音楽センターに足を運んだ事もありました。

妻は既に職業婦人で、ソロバンと英語塾を経営、私は会社勤務でした。妻は一生その仕事を続けたいという強い希望がありました。私は次男で、何処で暮らしても良い身の上、結婚してこの地でと心を決めました。妻の親に「生まれた場所も親戚も遠過ぎる」しかも、私が年下、結婚すれば姉さん女房との理由で反対されましたが、何とか説得して結婚の運びとなり、私の故郷から親戚も呼び、結婚式を挙げる事も出来、まずまずのスタートでした。

### 【結婚 子育て】

折からの高度成長期とも重なり、妻は出張教場も持ち、2人の子供にも恵まれました。私は朝家を出ると帰りが遅く、妻への子育ての負担は大きく、又、子供がカギツ子になる事もしばしばでした。結果私が勤めを辞め、自宅敷地内に仕事場を作り、自営の道に入ったのでした。1976年32歳の時でした。

若さと高度成長のお陰で4年後には妻の教室と私の仕事場を一体の建物に作り替え、仕事こそ違いますが同じ場所で夫婦共に子育てと仕事に精を出し、やがて子供達の将来の仕事を決める時が来ました。二人共、親の仕事に継ぐ意志は無く、企業への就職を希望、私共夫婦も子供たちの意志を受け入れました。そして子供達はやがて家を離れ、夫婦二人きりの生活の毎日が始まりました。

互いの仕事も猫の手も借りたい程の忙しさで相手が体

の具合が悪くても手を貸す事も出来ない有様でした。また妻は仕事柄、海外の方との交流があり、仕事絡みで海外に出掛ける事はありましたが、プライベートでは一緒に国内旅行すら出来ませんでした。

1993年どちらかの仕事を閉じる事にし、結局妻の藝を残しました。

私の仕事を1年がかりで整理し、18年間の自営にピリオドを打ち、私が妻の仕事を手伝う婦唱夫隨の道に入りました。それ以来常に一緒に余暇を過ごす事が出来る様に成りました。自営で定年はありませんが、65才まで余暇を楽しみながら続けようと目標を決めました。もし、どちらかが介護が必要な事があれば、その時は仕事を辞めようとも話し合っておりました。

そして2000年1月に長男が結婚し、孫も出来、初孫に目を細める事もしばしばの穏やかな日々が続きました。

### 【病発覚】

しかし、この幸せは長くは続きませんでした。翌年の夏頃から疲れを感じ始めた様でした。「60才の還暦を迎えると体力が衰える」と、歳のせいだと思っていたようでした。仕事柄、午後は時間が作れず、やむをえず近くの開業医に何度と無く検査のために足を運びましたが、「異状なし」と言われて帰ってくるありさまでした。

だいぶ時間が経過してから、膵臓の異常が発見されました。

県立がんセンターでCTの結果、膵臓癌の末期で余命5～10カ月の告知を受けました。再確認のための検査入院を言い渡されました。受付での入院手続きで「いつ入院できますか？」の質問に、「わかりません」と返答。「おおよそで良いのですが、いつ頃ですか？」と聞かれても「後日連絡します」と返答する狼狽ぶりでした。

手続きを済ませ駐車場から車を発進させようとしたのですが、急に、それまで堪えていた涙が溢れ、暫く発進出来ませんでした。

帰り道、車の中で過去を振り返り「どうして私のがんに…何も悪いことして来なかったのに…お父さん、ごめんね」と言う妻の言葉に、胸が張



佐々木清人さんと在りし日の奥様

り裂けそうでした。

妻は小柄で小太りした体形で、お産の時しか入院したことがなく、健康そのものでした。一方私はやせ形で貧弱でしたから、私の体を何時も気遣い、私を最後まで面倒見るつもりでいた様でした。自分が余命告知を受けながらも、なお私に対する心遣いする妻の健気さに、返す言葉もありませんでした。

### 【検査入院 治療方法】

入院の通知を持つこと一週間、直ぐにでも治療しなくてはの思いでいるこの一週間は、とても長い時が過ぎた気持ちでした。

11月8日、検査のための入院生活に入り、代わりに私が授業をつなぎでやる事になりました。妻の代役は重荷ではありましたが、授業が始まるまでは出来る限り妻の傍らにいてやろうと思いました。また、生徒や保護者よりの千羽鶴、寄せ書き、手紙の運び役として毎日病院通いしました。

余命告知と検査のストレスから食欲が無くなり、せめて少しでも食べられそうな物を持って運ぶ毎日でした。

一通り検査が終了、主治医よりの病状説明、治療方法の選択時には、家族全員が同席しました。結果は厳しいものでした。

手術は出来なく、効果ある治療方法も無いとの説明でした。放射線治療も抗癌剤治療しても、多少生きながらえるが副作用に苦しみ、その時間を差し引けば大差ないと説明でした。残された時間を有意義に送る事がベストでしょうとの医師からの提案でした。そう言われても、何の治療もせずに死を待つことは、私達には考えられませんでした。放射線療法により疼痛緩和効果のあることが説明され、また、後に悔いを残さないためにも治療を受ける事にしました。そして、奇跡が起きて欲しいと祈る思いでした。

正月は家族だんらんの時をとの医師の計らいで、治療は正月明けからとして下さいました。そして長男家族は、少しでも母親のいる病院の近くへというので、本庄市に引っ越し、都内への長距離通勤が始まりました。

### 【治療 闘病】

1月4日再び入院、治療は放射線療法で土曜、日曜以外は毎日行われました。25回の予定スケジュールの半分に来たとき、副作用がひどくなり治療は断念しました。しかし、この結果に家族は誰も後悔はしませんでした。

副作用もやっと回復し、3月8日退院、通院による週1回の抗癌剤（ジェムザール）点滴のみの治療に変

えました。

妻はこの時、「私はこれから何があっても入院しません、最後まで自分の家で過ごします」と言い出しました。私は一瞬心の中で、そのようなことができる筈は無い、むしろ逆に、いくら費用がかかっても近代的な設備の



整った施設で快適に手厚い介護の受けられる場所を探さねばと考えていただけに、その場合は、「食べ物が食べられる間はね」と、ごまかしの言葉を返さざるを得ませんでした。それ以上2人の会話は進みませんでした。

一方、仕事である塾は1日も早く後を引き継いでくれる方を探さなければと方々手を尽くし、ようやく、5月からなら受けられますと言う先生が見つかりました。そして待望の5月1日、すべての仕事を明け渡し本格的に私の介護が始まりました。

### 【介護】

少しでも快適に過ごせる様にと、住まいの部分改造、トイレ、障子の張り替え、カーテンの入れ替え、網戸の張り替え、ペンキの塗装、庭木の手入れまでしました。また、車椅子、アルカリイオン浄水器、マッサージチェア、出来ることすべてしてあげようと思いました。でも妻から返ってくる言葉は情けないことに、「どうせ永く使わないのに」でした。

妻は告知を受けて以来、身近にいる身内と数名の仕事絡みの方、ごく親しい友達以外には誰にも癌であることを伏せ、人に会う事を避け、内密にし、夫婦二人、人目を避けるように暮らす毎日でした。何の変化もない家の中は退屈に満ちていたので、気晴らしに車椅子を車のトランクに積み、家から離れた前橋、高崎のデパートでの買い物や公園へと人目を避けて出かけました。

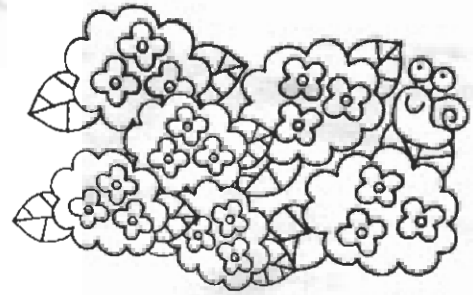
週1回の抗癌剤点滴も毎週出来るとは限りません。副作用による白血球の減少、回復を待ちながらの点滴、しだいに体力の衰えと共に回復が長引き食欲も無くなり心身のダメージは拡大して来ました。妻はついに自分の口から、「生きたくても生きられない、死にたくても死ねない、これなら自然のままに」と言い出しました。

〈次号へ続く〉



知りたい、聞きたい

Q & A



患者会を始めて一年以上過ぎた。この間、多くの患者さんやが家族の方たちが見えた。二人のドクターも、多忙な仕事を差し繰って参加して下さった。

患者さん、家族は、思いもかけずにおそわれた病気に多くの不安や苦悩を抱えている。この会に来て、同じ病に苦悩する仲間の話の聴き、そして自らの体験を話す。ドクターから専門的で、適切なアドバイスも参加者にとって力強い味方となる。

今回、その中で多くの方の疑問となっている「セカンド・オピニオン」についてまとめてみた。

Q セカンドオピニオンって何ですか？

A 二番目の意見という意味です。医療の場面で、診断や治療方針について主治医以外の医師に意見を聞く事です。

Q そんなことが出来るのですか？

A はい、出来ます。日本でも、四月から国立病院機構は、セカンドオピニオン制度を導入しました。患者が診察を受けた病院以外の専門医の意見を聞きたい時には、必要な診療記録等を相手先に開示、情報提供します。これは民間病院を希望する場合にも同様です。又、最近では民間病院でも、独自にセカンドオピニオンを専門に受け付ける医療機関もあり、「セカンドオピニオン外来」というのが開設されています。

Q 行った先で治療や検査がありますか？

A いいえ、データを参考にして意見を述べ、情報を提供し、相談にのることがセカンドオピニオンの役割です。

Q でも、なんだか先生に悪いような…それにせっかくお世話になっているのに言い出し難い気がします。

A 多くの方がきっとそう思うかもしれませんね。でも、大切な今後の治療方針や手術をやるかやらないかの決断は情報も医療知識もない患者や家族にとっては、とても大変なことです。

Q それは確かにそうです。手術のことや他の治療や抗がん剤や放射線…何が良いのか自分では判らなくて不安です。

A 主治医からはきちんとした説明をきくと受けられていると思いますが、それでも、不安があるのは当然だと思います。治療法を決定するという事は本当に大きな作業です。そんなときに知識のある人の意見を聞いてみたいというのは自然な発想です。

Q 先生の気分を害したり、そのあと、治療を受けられなくなったりはしませんか？

A 大丈夫、心配ありません。そのために制度化されたのですし、民間でも、このセカンドオピニオンが大切だから広がりを見せているのです。医療技術や治療方針は色々あります。特に、がん治療は最新の医療情報や技術の情報を持っている医師の意見を聞くことはとても有効です。そして、ご自分の病気の

治療を選択し、決めていくのは自分自身です。医師の言いなりになったり、何も考えたりしないうちから「全て先生にお任せします」だけは止めましょう。

### Q セカンドオピニオンを利用したい時は何かからすればいいのですか？

A 先ず、現在かかっている病気に関する検査、診療データを整えてくれます。これは頼んでその日に出るとも限りませんが、手元に来たら、それを持ってセカンドオピニオン外来を受けてください。先生が紹介してくれることもあるでしょうし、ご自分で探すのも良いと思います。私達もいくつかの医療機関をご紹介します。今はインターネットでもセカンドオピニオンについての情報をたくさん得ることも出来ます。インターネット上で相談を受けている「ネットドクター」もいます。

### Q 費用はどのくらいですか？

A 民間病院の場合は各病院によって異なってくると思います。国立病院機構では30分で五千元～一万元の範囲だと思います。

### Q 結構高い…ですよね？

A はい、高いと感じます…。30分で相談が済むとは思えないし、料金が加算されていくことを思うと、気持ちも焦りますね。

### Q でも、今迄は他の先生に聞くには同じ検査や診察を再度、受けなくてはならなかったから、先生同士で連携を取って、患者に考える機会が与えられるのは良いですね。

A この制度も今後色々課題はあると思います。これからも自分で考えていろいろな機関や制度を利用しましょう。

## 寄付

ありがとうございます

(2004. 1～2004. 5)

小笠原一夫様、霜田 展子様、神岡 順次様  
富岡 信義様

- ★ 群馬ホスピスケア研究会通常活動資金のための寄付  
郵便振替 番号/00560-4-5287  
名称/群馬ホスピスケア研究会宛
- ★ 看取りの家(こすもすの家)建設基金のための寄付  
郵便振替 番号/00170-9-47945  
名称/群馬ホスピスケア研究会  
「建設基金」

### 会計報告(2003. 4. 1～2004. 3. 31)

収入の部		支出の部	
前期繰越金	154,229	通信費	90,479
寄付金	190,840	会報等印刷費	241,796
補助金(高崎社協)	36,000	事務用品費	1,446
事業費	32,728	事業経費	45,340
入会金	9,000	次期繰越金	43,736
計	422,797	計	422,797

以上のとおり報告します。

会計 藤井

## 財政支援のお願い！

会員のみなさまには、日頃、本会の活動へのご理解とご支援を賜り、心より御礼申し上げます。今日、会としては、毎月一度ずつ、「死別体験者の分かち合いの会」及び「患者・家族の集い」を定例化しました。また、「ホスピスセミナー」の開催、「電話相談」「交流会」等の活動をしています。不十分な活動ではありますが、「ホスピスの理念を」を広め、一人でも多くの方が「心安らかに、豊かな生の完結の実現」ができるよう、そして、「遺族、家族として、その悲嘆を緩やかに、穏やかに和ませることができるように」を願いながら活動しています。ご承知のように、本会の活動は会員の皆様のご支援なくして在り得ません。毎年一度、会報とともに振込用紙を同封させていただいております。あくまでも、任意のご寄付であります。会の活動を底から支えるために、なにとぞ状況をお察しいただき、ご支援賜りますよう、お願い申し上げます。

群馬ホスピスケア研究会代表 土屋 徳昭

## これからの“患者・家族の会” “死別体験者の集い・分かち合いの会” 予定

月	患者・家族の会	死別体験者の集い・分かち合いの会
6月	6月12日	6月13日
7月	7月10日	7月11日
8月	8月14日	8月8日
9月	9月25日	9月12日
10月	10月9日	10月10日
11月	11月13日	11月14日

時 間：14：00から16：00

場 所：群馬県社会福祉総合センター

- 「患者・家族の会」は毎月第2土曜日
- 死別体験者の集い「分かち合いの会」は毎月第2日曜日
- 誰でも予約なしに参加できます。

## 編 集 後 記

**5** 月の分かち合いの会でた話題の一つ。残された人が楽しみを求めるときに亡くなった人にながしかの後ろめたさを感じることはないだろうか？

その問いに対して、花を見るときにはいつも亡き人も一緒に見ているのだ。また、“さくらの里”ハイキングではそつと写真を出してともに賞でていた人もいたとの紹介もあった。人それぞれだから一概にはいえないかもしれないが、夏の花火を遺影に見せたり、車を買って替えたとき助手席に遺影をのせて初ドライブしたことなどが思い起こされた。(S・K)

**G** Wに娘と清里に出かけました。急な思いつきで新幹線に乗り佐久平まで、小海線に乗り換えて沿線の新緑や田園風景を眺めながらのローカル線の旅。

清里は空気が爽やかで建物もおしゃれ、手入れの行き届いた花壇が多かったので、牧場通りから南木の村方面を半日かけて散策しました。

都会でハードな仕事をしている娘にとっては、緑が多い自然の中で乗馬の体験をしたり、小鳥の声を聞きながらお茶して癒しの時を満喫したようです。(T・F)

**こ** 自身のがんを知ると多くの人は絶望の淵に立たされたように、嘆き、苦しむものだと思っていた。

あるとき、一人のご婦人が会を訪れた。

「私は検診で乳ガンです。と言われたとき、なぜか心がすがすがしくなった。わたしが、私らしく生きられるチャンス、私が、わたしのことだけ考えていきられる時間を与えられた様な気がしたからです。」

「遊び人の夫と結婚、その上、病気の男の面倒を15年も看ました。男が亡くなり、娘も二十歳を迎えたとき離婚を決意しました。」「お母さん、もう我慢しなくていいんじゃない？娘も賛成してくれました。」「夫は出て行きました。」

「がんと言われて、不思議にショックも動揺もありませんでした。鈍いから、受け止められていないからかもしれません。でも、医者、「早期だからすぐ切れば治るよ、すぐ入院し

ましよう」と言う言葉がむしろ気がかりでした。そんなに簡単に、自分の大事な体のことを言われるままにしているのだろうか、矢継ぎ早の医師の言葉が、逆に、私の行動にブレーキをかけさせました。

いま、誰にでも隠さず「私、乳ガンだと言われたの」と言っています。私には、必ず治るという確信があります。

で、いろいろな情報を集めて、最善で、自分が納得の得られる方向で治療したいと思っています。

その人の表情は澁刺と輝いている。生気に満ちている。人にはいろいろな考え方があつるものだなー…。人間ってすごいなー…。(N・T)

**5** 月の分かち合いの会で、お葬式の話がでたとき、私は、数年前ボランティアで関わった方のお葬式を思い出していた。奥様をがんで看取られた数年後、ご本人も同じがんで亡くなられた。生前から自分のお葬式は、ごくごく簡略にと言っておられ、親族と私たち数人のボランティアでとりおこなわれた。その言葉通り、本当に簡単で、質素だった。友人・知人の追悼の言葉もなかった。そこに参列していた私は、言いようのない寂しさと、整理のつかないもやもやとした自分の心の置き場がないまま、葬儀は終わってしまった。私もそれまでは漠然とではあるけれども年々派手で形骸化しているお葬式に見るにつけ、同じように考えていた。しかし、そのとき感じたのは、お葬式や法事というのは亡くなられた本人のためではあるけれども、むしろその本人をとりまく身近な遺された人たちのためでもあると強く思った。分かち合いの会で、ある参加者が言った。「お葬式は遺された家族のためでもあるんですよね」と。悲しみを抱え遺された家族が、気持ちを整理し、生きて行くうえで必要な儀式なのだと改めて思った。(T・T)

